HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	死に行く神の伝播とイスラエルの神 ： 嘆きの女性をめぐって
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，15：129-146
発行日	2000-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

死に行く神の伝播とイスラエルの神
——嘆きの女性をめぐって——[1]

桑 原 俊 一

ABSTRACT

This paper deals with the diffusion of cults of dying gods in the ancient Near East, including ancient Israel. Stories of dying gods were widespread from Mesopotamia to Greece and Israel. The cult of Dumuzi, for instance, originates in the tale (often presented dramatically) of the dying god in the ancient Mesopotamia. The purpose of this paper, however, does not make clear the all phases by which traditions of the dying gods, but rather tries to explicate one factor of this cult: the origin and nature of public lamentation over the dying god, especially the lamenting women for dead sons or husbands. The most obvious feature or central idea of this cult is representation of the death and resurrection of gods, along with the seasonal cycle, especially during the winter and in the spring.

Dumuzi, god of fertility, who embodied nature's powers for new life in the spring, became the Semitic god Tammuz. The cult of Tammuz spread to Greece as the festival of Adonia (god of Adonis) and celebrated by women in Israel. Tammuz cult seems to have revolved around two yearly festivals: one was celebrating the marriage of Tammuz to the goddess Inanna/Ishtar; the other was public lamentation for his death by groups of wailing women. On the one hand the marriage rite developed publically for political reason to enable the king to take on the identity of the god, while on the other, in an unofficial capacity, women continued to lament the death of Tammuz in festive rites.

The annual festival of Adonia was held to celebrate such adonic figures as Osiris and Dumuzi at Byblos and elsewhere. Israelites,

especially women, commemorated Tammuz festival with rites of public lamentation (Ez 8: 14). Since the biblical texts claim that Yahawh is only god, pagan gods were therefore in principle excluded, yet, in reality, evidence of Israelite religious practices attest that the pagan gods was worshiped from beginning to the end of the Joshua's reformation (B.C.722). The problem is to decide who in Israel supported the pagan gods or goddesses: Baal, Asherah, Astharte. It is well known, for instance, that the king Omuri worshiped the Cananite god Baal, since the prophets criticized him for doing so.

Goddesses were worshiped for long time in Israel. The question is: who were the worshippers? My research represented in this paper has attempted to solve this enigma from a socio-religious point of view. Just as the festival of Adonia involved women who were placed in the lower stratum of social order, so in Israelite women supported the festivals of goddesses as a means of sustaining their own lives in the patriarchal system of ancient Israel.

Key words: *cult, wailing women, Dumuzi, Adonis*

1　古代東地中海沿地域とイスラエル

1.1　古代メソポタミアにおいて，シリアとパレスチナは古くから1つの地理的単位を形成していた。しかしパレスチナを『約束の地』としたイスラエルの定着によって，前2000年紀中頃以降，パレスチナは政治的にも，文化的にも固有の領域となっていった。メソポタミアとエジプトの資料によれば，この地域は1つの単位を与えられていた。シリア．パレスチナにおける前3000年紀－前2000年紀の資料は『アムル（西方)』と呼ぶ。他方，エジプト中王国（前21世紀－前19世紀）では『レテヌ』，新王国（16－13 BC）では，『ジャヒ』，『フルの地』と呼んだ。[2]

イスラエル自身は『民族表』（創10)[3]と『セムの系図』（創11：10－26)[4]から明らかなように，オリエント世界の一員であることを自覚していた。

そこでイスラエルの歴史や文化は古代オリエント世界の文脈に据えて理解することが必要である。この意味で，多種多様な文化が発達していた古代オリエントの一画に，後から定着を始めたイスラエルは文化的衝突と受容をよぎなくされたのも当然であった。[5]

王国時代に多くのカナン的要素がヤハウエ宗教に受容された。とくにカナンの女神による豊穣祭儀が流れ込んだ痕跡のあること（詩 82，申 33：8－9）[6] とオムリ王朝時代[7] のバアル宗教[8] がよく知られている。それゆえ預言者ホセアやエレミヤはヤハウエ宗教を守るためこれらの宗教の受容を厳しく批判したし，ヨシュア王の宗教改革（前 662）はこれら異教的祭儀を排除した。しかしこうした改革後も前 6 － 4 世紀におけるエレファンテネのユダヤ人はヤフ（ヤハウエ）の神殿を建て，また彼等の間にはアナト，アシャム．ベテル（？）という女神の崇拝が認められる。このように文化的衝突と受容の問題は古代イスラエルにおいても恒常的な問題であった。

1.2 本稿では旧約聖書の場合，エゼキエル書 8：14[9] で言及されているタンムズ神のを取り上げその神の伝播と受容の問題を検討していきたい。論題を『死に行く神の伝播とイスラエルの神』としのはタンムズ神がオリエントから，広く東地中海つまり，フエニキア，エジプトさらにギリシャへと神名を変えながらも基本的には死と再生の神として伝播されていているからである。ことにギリシャ．ローマで親しまれたアドニス，フリュギアのアッティス，エジプトのオシリスの神々はその起源をタンムズ神に，そしてタンムズ神を遡れば，シュメールの神ドゥムジ神[10] にまで辿り着くことを祭儀の一断面，特に嘆きの女性の観点から述べてみたい。さらにフェニキアを起源とするビュブロスのアドニア祭（タンムズ祭儀）が地理的一員であったイスラエルのヤハウエ宗教と女性と間の諸問題とどう関わりあっていたかついても論考を加えることにする。

2　オリエント文学とエルシェンマ（Ershemma）哀歌

2.1　先ずはじめにオリエント文学におけるエルシェンマ（Ershemma）哀歌[11]を手がかりにしながら，ドゥムジ／タンムズ神の神話と祭儀を再検討しつつ，アドニス神話を軸にイスラエルのカナン的民間信仰を探ることにする。そこでわれわれのテーマに関連するシュメール・アッカドの文学を検討対象にすることからはじめたい。シュメール・アッカド文学は大きく分類すれば，他の古代文学と同様：1．神話と叙事詩　2．知恵文学　3．讃歌，祈祷文，哀歌の三つのジャンルに分類される。[12]われわれのテーマであるタンムズ神（ドゥムジ）とそれに関与する女神たちの文学的特徴は誰が（われわれの場合女性に限定することにする）誰を嘆くのかという視点から観察するとこの主題の輪郭が明確になる。神話を含めた関連テキストを列挙すると次の通りである。[13]

A.シュメール文学

(1)　Death of Dumuzi 「ドゥムジの死」
　　イナンナとゲシュティナンナ」はドゥムジを嘆く

(2)　Dumuzi's Dream 「ドゥムジの夢」
　　荒れ野などがドゥムジを嘆く

(3)　Ershemma of Inanna and Dumuzi no. 97 「イナンナとドゥムジのエルシェッマ」
　　イナンナ　ドゥムジを嘆く

(4)　Ershemma of Dumuzi no.165 「ドゥムジのエルシェッマ」
　　イナンナとゲシティナンナはドゥムジを嘆く

(5)　Ershemma of Nergal 「ネルガルのエルシェッマ」
　　母はネルガルを嘆く

(6)　Ershemma of Ninhursag 「ニンフルサグのエルシェッマ」
　　ニンフルサグは息子を嘆く

(7)　Damu texts 「ダムのテキスト」
　　母，妹（達）はダムを嘆く

(8) Inanna and Bilulu 「イナンナとビルル」

イナンナはドゥムジを嘆く

(9) Lisin, Weeping mother 「嘆きの母。リシン」

リシン女神は息子を嘆く

(10) Lament for Lulil 「ルリルを嘆く」

エギメは弟ルリルを嘆く

(11) Inanna's Decent to the Netherworld (OB) 「イナンナの冥界下り」

ニンシュブルはイナンナを嘆く

イナンナの代理代の者を捜す

(12) Ninlil and Enlil 「エンリルとニンリル」

ニンリルはエンリルを捜す

B.アッカド文学

(1) Ishtar's Descent to the Netherworld 「イシュタルの冥界下り」

パプスカルはイシュタルを嘆く

ベリリは弟タンムズを嘆く

(2) Nergal and Ereshkigal 「ネルガルとエルシキガル」

エレシキガルはネルガルを嘆く

エレシキガル　ネルガルを捜す

われわれの主題と今ここで直接かかわるものは第三の類型に属すテキスト，つまり讃歌，祈祷文，そして哀歌で，その中でも「嘆きの歌」である。神話に基づいたこの世から冥界へ姿を消した者，つまりドゥムジないしダム神の死はエルシェッマの嘆きの歌に典型的に見れる。[14] ここには地下界に下った神，ドゥムジを嘆く哀歌が代表的作品として知られていが，これらの哀歌は Ur 第三王朝 (前 2112－2004) からセレウコス王朝 (前 320－後 620) に至るまで長く伝承されてきた。同様な文学的テーマを持つののに，エジプトのオリシリス神話とギリシャやシリアのアドニス神話がある。ただし，われわれの課題は周辺諸国に流布する類似の文学様式の比較，こと

に旧約聖書の詩編の中の哀歌との比較検討を意図してはいない。本稿ではシュメール・アッカド文学に固有な哀歌の主題と儀礼を精査し，女性の嘆きと儀礼が東地中海の領域でいかにして伝播していったのかその過程を考察することに主点を置くことにする。われわれの研究テーマにとってとりわけ重要な一次資料はエルシェッマ哀歌である。この文学の根底にドゥムジとイナンナが関連する神話があることは明確である。つまりここには死すべき運命にある神と不死の女神の密接な関係がある。それと同時に，両性の交わりによって豊穣を約束する宗教的モチーフがあることも確かである。さらに女神が愛する者の死を嘆き，死せる者の再生を喜ぶというテーマがあるものと思われる。

2.2　そこで先ずわれわれの主題にとって典型的な女神が愛する者の死を嘆くエルシェッマ哀歌における主要な文学的モチーフをドゥムジ関連のテキストに限定して検討することとする。おおよそ5つの特徴が認められよう。

(1)イナンナの冥界拘留と地上の神殿の崩壊。[15] 冥界の女王エレシキガルによって，イナンナが冥界に引き留められているため，エアンナとウルクの神殿は崩壊する。(イナンナが冥界に拘留されている間地上の生産活動も停止する。)[16]

(2)ドゥムジの変身。[17] 悪霊ガルラ達は逃れようとするドゥムジを羊の牧場で取り囲む。ドゥムジの懇願に太陽神ウトゥは悪霊ガルラの追跡から引き離すためドゥムジを四足獣に変身させる。この主題は「ドゥムジの夢」と平行する。つまり，悪霊はドゥムジを追跡する。ドゥムジはウトゥに懇願して四足獣に変身させてもらい，悪霊の追跡から逃れる。[18]「イナンナの冥界下り」ではドゥムジはウトゥに蛇にさせてもらう。

(3)背信行為。[19] この主題の終の部分ははっきりしないが，分かっていることはドゥムジは愚かにも逃亡して妻イナンナのもとに走る。しかしドゥムジはイナンナによって悪霊たちに渡され，小舟で冥界へと流れ下る。[20] ここには妻や友人による裏切りというモチーフがある。このモチーフはドゥム

ジの隠れ場所を蠅に賄賂を贈って競うエルシェンマに発展する。それによるとドゥムジは悪霊たちから逃れるが，イナンナとゲシュテナンナはドゥムジがどこにいるのか居場所を知らないでいる。蠅はイナンナとゲシュテナンナに賄賂を要求する。蠅はゲシュテナンナの差し出したものを受け入れドゥムジの隠れ場所を教えられる。ゲシュテナンナは悪霊たちによって傷つき弱っているドゥムジに回復を願って食物を差し入れる。[21] この最後の部分は他のエルシェッマにも見られる。[22]『ドゥムジの夢』では，姉ゲシュテナンナは弟ドゥムジの隠れがを漏らすことを拒否する。しかしドゥムジの友人は賄賂につられて悪霊にドゥムジの存りかを明かす。このエルシェマ全体を被っている主題は妻イナンナによるドゥムジの裏切りにあるといえる。[23]

(4)女神イナンナはドゥムジの死を嘆く。既に上記したテキストの出典と同様にドゥムジとイナンナの関わるエルシェッマ悲歌にしばしばでてくる。他のテキストによればイナンナは夫ドゥムジの死に責任があった。ドゥムジのためイナンナは年ごとに泣くことを定められる。[24] この伝承については『ギルガメシ叙事詩』第6板第2欄1－2[25]や前出のエゼ8：14に明白である。その後悪霊たちは羊の囲いに入り込みドゥムジを逮捕することに成功する。女神はドゥムジを捜索するが，結局失敗に終わる。

(5)ネルガルの逮捕と死。[26] ネルガルは悪霊ガラによって逮捕され，その肉体は切断される。ネルガルの母は息子の死を嘆く。これも『ネルガルとエレシキガル』の昨品名で知られるネルガルの情況と類似する。エレシキガルの大臣ナムタルに対する不敬罪ゆへに冥界へ引き降ろされるネルガルの描写とも関係しているる。また『イナンナの冥界下り』の中でイナンナがエレシキガルの夫グガラアンナ送葬の儀に参列するというくだりと脈絡を一つにするものである。[27]

3　東方から西方へ

3.1　さて東地中海に広がったタンムズ神に触れておこう。アドニス[28]，

アッティス[29]，オシリス[30]についていえばこれらは季節の変わり目の中で死にそして再生する植物神であり，次々と命を与え，愛し，また破滅へと導く女神たちの脇役を演じる。この死と再生のドラマは冬の死とに春の甦りの寓意から自然界の循環によって保証された。[31]年ごとにおこなわれるアドニア祭は嘆きと死の儀式が執り行われる。しかし再生さらには復活に言及する資料証拠はごく少なく，存在しても後代のものに限られる（キリスト教教父の著作)。フュルギアのアッティスの場合はむしろ存在しないといったほうがよい。オシリスの場合でも，彼は現実にこの世界に甦るというようりは死者の世界で死を超越した命を得るにすぎない。以上がエルシェッマ哀歌のドゥムに関する主要な文学的モチーフであるが，タンムズ祭，アドニア祭やイスラエルを含むカナンの女神祭儀に幾つか共通して認められるモチーフがあるように思われる。ひとまずこれについての検討は後に譲ることにする。

3.2　1940年代以降テキストにそれまで欠損部分のあった『イナンナの冥界下り』のシュメール版の神話はクレーマー，ファルケンシュタイン等よって公刊された(伝承系統の異なる断片)。[32]それにより以前はイナンナ，つまりバビロニア名イシュタルは冥界に下って行き，植物の神を再び命へ連れ戻すと考えられていたが，[33]しかしそうではなくイナンナは冥界から戻った後，いまだ生きていて生者の間で王座にすわっているドゥムジを殺すことになる(乾季の到来による地上からの失踪)。つまりイナンナは冥界のガルラ霊に手渡して，自分の身代わりとしてドゥムジを死刑に処する。ある者の甦りはある者の死を要求する(代理者による冥界との均衡)。これは只単なる季節ごとの植物の死と再生の寓意といったものでないはない。[34]

4　ギリシャのアドニスとオリエントの神々

4.1　アドニスにはアルカイック期（前6世紀)）のギリシャ人が受け入れたセム語系の神の最も明確な例である。アドニスの中にあるアドン(Adon)

は西セム語に共通した言葉であり，「主人」を意味する。アドニ（adoni）は神名ではなく，むしろ一般的に神に使用される名称である。語源とともにアドニスのセム語との結びつきは儀礼によって確かなものとなった。この儀礼の中心は夏の初めに愛の女神アプロディテの恋人である美青年アドニスを嘆き悲しむ女性たちである。この嘆きはバビロニアからシリアそしてパレスチナ[35]に至るまで広く認められ，イシタル＝アシュトレトの夫タンムズに対応する。[36]シュメール語テキストにおけるイナンナとドゥムジである。この他ギリシャの儀礼の中にはセム語系の儀礼に依っているところが2つある。(1)香料の占める割合が大きい。アドニスはミュッラ「香油の木」の息子であり，ミルラは前7世紀にセム語系社会からギリシャにやって来た外来語である。神話によればアドニスはミュラーを母として誕生する。父との間に恐ろしい罪をおかしたミュラーはアラビアの南にまで逃げ延び，やっとのことで祈りがきかれ没薬の樹＝ミルラと変身し，樹皮の割れ目から生まれる。[37](2)アドン（Adon）は西セム語に共通した言葉であり，アドニア祭が屋上でおこ行われるのはカナン地方では極ありふれたことであっても，[38]決してギリシャ起源ではない。[39]その他，アドニス儀礼に伴う諸特徴の幾つかは聖書にその痕跡を見ることができるかもしれない。[40]

4.2　セム語系の中に出てくる名称は常にタンムズである。ビュブロスのアドニア祭はしばしばギリシャの作家によって言及されている。ビュブロスの〈婦人〉（Baatat Gebal）は青銅器時代以来ずっと確認できているが，その夫に当たる者については資料に乏しい。しかし嘆きを受ける神がアドンの称号を持つ以上セム語系の人々にとって，この神はタンムズであった。

セム語系のタンムズのもとになっているドゥムジは牧人でイナンナの恋人でもある。シュメールのイシンの王はイナンナを崇拝し，ドゥムジの役割を引受け，女神と自分たちとの聖婚を祝ったのである。他方で，しかしドゥムジはイナンナに殺され，女たちに嘆き悲しまれる存在となる。彼に因んで名付けられた月に追悼の儀礼がおこなわれた。『イナンナの冥界下り』で，イナンナが最後に自分の身代わりとして地下のガルラ霊にドゥム

ジを渡す場面が描かれている。他の版ではガルラ霊から逃れるドゥムジが描写されている。蛇に姿を変え逃げまどうが，結局のところ捉えられドゥムジは死ぬ。ドゥムジの姉ゲシュティナンナがドゥムジを探しだし，自分自身が冥界の代理となる申し出をする。こうして「お前は1年の半分を，お前の姉は1年の半分を冥界で分かち合うことになる」。[41]

4.3　イノシシによるアドニスの死の物語はギリシャ以外のどこにもない。これはギリシャ神話におけるイノシシ狩りをするアドニスの話とは何のかかわりもない。しかしギリシャ人の残したアドニス神話には他の伝承が伝わった。アリスティディス[42]の弁論を初めとしてキリスト教父たちは物語の結末を書き加えた。アプロディテがその後冥界に下りペルポセネにアドニスを返してくれるように頼む。ゼウスは両方の女神にいう，「アドニスが1年の半分は地上に存り，その残りの間は地下の世界にいるという約束をした。この部分は明らかにシュメールの神話を書き換えたもである。つまりキリスト教教父たちのテキストはシュメール・セム系のタンムズ神話によってギリシャのアドニス神話を加筆し変容したという印象を受ける。冥界の女王はエレシキガルとペルポセネであり，そして死に追いやられるのはドゥムジとアドニスであるという構図が読み取れる。イナンナとゲシュテナンナはアプロディテがその役割を負っている。

けれどもアポロドロス[43]の要約を通して知られている前5世紀の詩人パニュアシスの述べているアドニス神話ははるかに古い形を残している。「アドニスは子供のとき，大変かわいくて美しかったので，アプロディテが彼を連れ出して隠してしまう。そして彼を棺の中ににいれて，これをペルポセネに渡した。その後アプロディテが彼を返してくれるように望むと，ペルポセネがこれを断わる。というのはペルポセネもまたこの美青年を愛していたからである。この後争いが起こり，この争いに決着をつけるのはゼウスである。ゼウスの仲介によって，アドニスは1年の3分の1をアプロディテと，3分の1をペルポセネと残る3分1は自分自身のものとなった」。愛する男を棺に収め，場所をえらぶのに事欠き彼を冥界へと送るとい

うアプロディテの愛と憎しみの双方の性格があらわれている。シュメールの神話の，イナンナ，エレシキガル，そしてドゥムジに当たる。[44]

物語の基本的構造は明らかである。愛の大女神がいて，若い伴侶を選ぶ。女神は彼を愛していた。しかしその後，大逆転が起きて，女神は彼を死の女神のもとへ送出してしまう。終局は愛と死の和解によって，上の世界と下の世界との均衡が回復される。

タンムズのために嘆く毎年の嘆きの祭はメソポタミアから，シリアとパレスチナに広がり，さらにアドニスの名となってギリシャに伝播された。タンムズに対する嘆きの歌は中世に至るまで，ユーフラテス河支流の町では存在していた。

5　東地中海沿岸地域とイスラエルの神々

5.1　さてイスラエルとの関係であるが，牧羊の時代を経てカナン定着の時代そして王国時代は文化的にはイスラレルにとって異文化との衝突というよりは，異文化の受容の時期であったと思われる。豊穣女神（聖木祭儀＝常緑樹に宿る生命力礼拝）アシェラ女神[45]はバール神の配遇者となってアハブの宮廷で崇拝された（王下 23：4；王下 18：19）[46]。たとえヤハウェ宗教が多神教排斥の中でアシェラ崇拝を拒否して，民を不幸にし（士師 3：7；王上 14：15）[47]，さらに罪とされ，けん責されても（王上 15：13；王下 21：2）[48] エルサレムではヨシュアの宗教改革（前 622）まで継続された。ソロモン王はバビロニアのイシュタル女神に相当するアシュトレト女神[49]も豊穣神として，また祭儀においては聖しょう的特徴が強調されて崇拝された（王上 11：5）[50]。もともとティロスやシドンの主神として，「天の女王」であり，愛と戦いの女神であった。ギリシャのアプロディテにも当たる。アシュラ女神の消滅後，アシュトレト礼拝はエルサレム神殿の崩壊（前 586）まで続いた。

近年の考古学的成果がなによりもこのことを物語っている。[51] 建造物やその備品またそれらに施されている装飾が当時のシリアやレヴァントのも

のと共通する。イスラエルのカナン化は避けられなかった。分裂王国の時代になって，北イスラエルの宗教事情はヤロベアム1世が「金の子牛」を置いたといわれているダンからはカナンの様式が施された祭壇が出土している。クンティレト・アジュルード（ホルヴァト・テマン）からは複数のヘブライ語碑文が出土しているが，それらのなかには，「エルとバール」，「テマンのヤハウェ」，「サマリアのヤハウェ」と「彼のアシェラ」といった語句が認められる。バアルの配偶女神として言及されるカナンの女神（ウガリットではエルの配偶女神）の可能性が高い。ユダ王国においても事情は変わらなかったようである。エルサレムやその他のユダの遺跡からは多数の裸の女神（アシタロト？）や動物をあしらった土偶が発見されている。ヘブロンの西ヒルベト・エル・コムで見つかった墓碑文には「ウリヤフがヤハウェと彼のアシェラに祝福されるように」と記されていて，ユダ王国においても，カナンの女神をヤハウェの配偶女神と看做していたようである。

結　　び

メソポタミアの場合，年祭に神々の結婚のドラマが行われていた。聖婚について言えば，Ur III 王朝（前2112－2004）のウンマでは神の聖婚劇が2月から3月に行われていた。イシン・ラルサ時代（前2004－1792）では王と女祭司との結婚が聖婚に取って変わる。神の死については3月から4月にかけて祭りが祝われたらしい。紀元前7世紀のアッシリアでは6月から7月に移されてタンムズ祭礼となった。特に婦人たちによって守られた。

さらにわれわれのテーマに即していえば，注目すべきことはエルシェッマ哀歌が主要方言であるシュメール語ではなく，エメサル方言，つまり女性方言で書かれていることである。主要方言が専ら宮廷文学の必要から用いられた(神話，叙事詩)。それに対しエメサル方言は行政から離れたところに基づいていた。女性語で記されたことと女性の嘆きがここで対応していることになる。これに加えて，エルシェッマはガラ祭司の式文であった。

バラグ（Balag）という楽器（たぶんハープか太鼓）に合わせて，エルシェッマ作品を朗唱した（例，グデア刻　文前2140）。ガラ祭司の宗教活動について充分明らかではないが，(1)送葬の場でエルシェッマ作品を朗唱すること，(2)旅立ちや建造物の建立の場合に悪魔払の呪文を唱えること，(3)神の怒りを宥めるため荒廃した聖なる建造物を前にエルシェッマ哀歌などを朗唱した，ことが上げられる。

エルサレムでは前5世紀のアテナイと同様，タンムズ祭は国家的に制定された祝祭ではなく，女性が自発的に行ったいわば非公式の行事であった。男性優位の社会にあって，女性たちは香料と嘆き，そして絶望という情緒的な雰囲気を備えた祭をとおして，日々の抑圧からの解放を得たのである。このことはギリシャのみならず，それ以前のパレスチナにおいてもまたメソポタミアにおいても同じことがいえよう。

1 本稿は平成10年度北海学園学術研究助成を受け，日本基督教学会第47回学術大会で発表したものに加筆整理を加えたものである。

2 石田友雄，『総説旧約聖書』（日本基督教出版局，1984年）57-58頁。

3 10：1以下『ノアの息子，セム，ハム，ヤフェトの系図は次のとおりである……ヤフェト[3]の子孫は……ハムの子孫は，……セムにもはま子供が生まれた……』

4 『セムの系図は次の通りである……』

5 ホメロスに遡る2000年以上前にメソポタミアでは文字の文化が開花していた。近年ギリシャ文化とメソポタミアのそれとの様々な比較研究が進められている。ギリシャが暗黒時代から抜け出したのは前8世紀の末であり，ギリシャ神話の大半が次の世紀までかかっている。東方から西方へと神話と儀礼の伝播がされたという事実は確かである。しかし伝達の事実は錯綜していて究明は容易ではない。本稿ではアドニスにかかわる神話と儀礼に焦点をおいて検討する。

6 Cf. 神殿娼婦やアシェラについて言及されよう。

7 前886-875。

8 紀元前2000年期エブラ（Ebra）文書に現われる。'a-da，地名として，baal-peol，Baal-hermon，Baal-hazor などが知られている。バアル崇拝については，エリアとの対決（暦代上18）やホセアの批判（2：18）に顕著である。

バアル神についてはさらに言及する。

[9] 『彼はわたしを，主の神殿の北に面した門の入り口に連れていった。そこには，女たちがタンムズ神のために泣きながら座っているではないか』。バビロニアやアッシリアでは神々中タンムズを崇めたが，政治的理由から礼拝を要求することはなかった。従って，タンムズ祭儀は政治的支持を得ることなくユダに伝えられたことは可能である。

[10] その意味は「忠誠な息子」である。人名としてはファラ期にでてくる。別名Amusumgalanna「天竜の母」である。王名表によれば，Badtibiraでは羊飼であり，Urukでは漁師の伝統をもつ。ウル第III王朝以降叙事詩的伝統はない。つまり英雄神話としてはでてこない。ただし，この時期の経済行政文書は疑いなく異なるドゥムジに言及している。

[11] eršemaを文字通り訳せば「šem太鼓の嘆き」である。エルシェマ哀歌については以下更に検討するこことする。テキストの底本としてM. E. Cohen, *Sumerian Hymnology: The Eršemma* (cinninnati, 1981) を用いた。

[12] W. v Soden, *Einfürung in die Altorientalistik* trans. by D. G. Schley (Michigan, 1994). *The Ancient Orient* 203ff.

[13] 古バビロニア語 (OB，1900-1600 B.C.) 時代は文学活動の関点からすると，夥しい文学活動が行われた時期であった（ことに南部においては)。その後アッカド語がシュメール語にとって変わり始めた。しかし所謂文学はシュメール語が使用され続けた。シュメール文学は2方言が使用された。

(1)標準シュメール方言（主方言）で宮廷の文学活動や祝祭の言語として用いられた。

(2)エメサル(Emesal女性方言で宗教儀礼，嘆きの歌エルシェッマ(Ershemma)，イナンナがかかわるテキスト並びに多少の格言などが書かれた。

OB以降カッサイトの時代に入るとシュメール文学の転機がやってくる。標準シュメール方言は原則として文学に使用されなくなり，2言語併用（シュメール語とアッカド語)が行われる。エメサル方言による哀歌は継続された。ここでには書記養成所 (É. duba) と言語使用の政治的問題が論考されるべきであるが本稿とは直接関係しないので立ち入らない。

なお枚挙されたテキストの出典については拙書　学位論文　*The Netherworld inSumero-Akkadian Literature* (Berkeley 1991) を参照せよ。

[14] 特に，no.97, no.60に顕著である。以下no.はM. Cohenによるエルシェッマテキストの番号を示す。

[15] no.97.

16 『イナンナの冥界下り』を参照せよ。以下テキストの日本語訳は『筑摩世界文学大系 1』古代オリエント集（筑摩書房，昭和 53）による。

17 no.97.

18 197 行-204 行。

19 no.97.

20 ドゥムジの死による埋葬地はバドゥテビラ（Badtibira）であろう。起源的にシュメールではバドゥテビラはドゥムジ祭儀の中心であった。『イナンナとビルルの神話』からもドゥムジの死による埋葬地はバドゥテビラ（この神話では生誕地）であったと想定できる。

21 no.165.

22 no.88。ドゥムジを姉ゲシュテナンナと母ドゥトゥルは捜索する。ドゥムジは母の神に助けを懇願する。ドゥムジは悪霊たちに逮捕されている。彼は傷つき，裸にされて縛られている。ゲシュテナンナはドゥムジを見つけだして新しい着物を差し出すが，彼は姉に頼んで母の所に行きパンを求める。

23 イスラエルのヤハウェにたいする背信行為と文学的関係が認められるかもしれない。

24 ヨベル書 34：18　第 7 の月の 10 日目は全体的な哀泣が行われた。

25 訳は月本昭男『ギルガメシュ叙事詩』（岩波書店，1996 年）。

1　囚われ者，彼の腕を［あなたは掴んだのだった。］

2　あなたの若［いときの］恋人ドゥムジのために，

3　あなたは毎年，泣くこと定めたのだった。

26 悲歌 no.60 に見られる主題である。

27 M. Cohen，前掲書 92-93 頁。

28 死と復活を毎年繰り返すビブロスの植物神で，アドニア祭として祝われた。祭儀の中心は流血を伴う死と破壊，嘆きと儀式である。アドニスは春，果物，穀物の穂を表象する。アドニスの死を悼むのは本質的には穀物神を宥めるための儀式であったと考えられる。

29 フリュギアの豊穣を約束する植物神。冬に死に春に蘇る。

30 オシリスの起源については明確ではない。下ナイル地方の神で，地界の豊穣神であった。のち前 2400 頃から明らかに豊穣神と王の死と復活の体現者となる。ホルスは母をイシス，父をオシリスとして復讐者として生まれる。イシスはセトに殺害された夫の遺骸を執拗に探し求め，夫のために嘆き悲しむ。探し当てた遺骸に再び生命を吹き込み，その夫によって受胎したホルスによってセトに対する復讐を果たす。

[31] E. O. Jemes, *Ancient Gods* (New York, 1960). 夏に死に，春に再び復活する自然の生命の神格化と解する。Th. Gaster, *Thespis*, (Gordian Press, 1975) 23-77. 季節の循環に応じた諸儀礼である。T. Jacobsen, *The Treasures of Darkness*: A History of Mesopotamian Religion (New Haven, 1976), 23-63. 豊穣の神の死，つまりドゥムジ儀礼として捉える。J. C. Moor, *The seasonal Pattern in the Ugaritic Myth of Ba'lu AOAT*, 16 (1971)，死ぬ神の新しいタイプとする。夏の干ばつと死の神 Môt が地上を支配する間，Ba'lu は地界に下るが，Anath によって冥界から解放される。反逆的な海 Yamu に対して勝利の戦いをする。Ba'lu 神話全体の構成については確定的ではないことを付記されなければならない。

[32] S. N. Kramer, "Inanna's Descent to the Netherworld," *JCS* 5 (1951), 1-12. A Falkenstein, "Inannas Gang zur Unterwelt," *AfO* 14 (1941/44) 113-138. O. R. Gurney, *JSS* (1962) 147-160.

[33] Cf. S. Langdon, *Tammuzu and Ishtaru*, (Oxford, 1914).

[34] 注目すべきことは，代理人（『イナンナの冥界下り』のゲシュテナンナ）を立てて冥界から逃れる部分，つまり各々ゲシュテナンナとドゥムジが半年間を冥界で過ごす記事（『イナンナ／イシタルの冥界下り』）の終わりの部分はエルシェッマ哀歌には存在しないことである。

[35] ウガリットのバール神話にみられる死からの再生の物語（自然界の再生）はビブロスのアドニス神話を生んだ。

[36] バビロニア以外のセム語系資料は帝政期ものである。タムザ（Tamuza）とバルトィ（Balti）〝婦人〟の祝祭に対する招待が記されている。アシュトレトとタンムズの家で悲しみに暮れ，座っている人々に対するマンダ教徒たちの論争文がある。

[37] セム語の古い資料は聖書である。

ゼカリア 12：11『その日エルサレムにはメギド平野におけるハダド，リンモンの嘆きのような大きな嘆きが起こる。』

エレミヤ 44：17-19『……ところが天の女王に香をたくのをやめ，ぶどう酒を注いでささげなくなって以来，我々はすべてのものに欠乏し，剣と飢饉によって滅亡の状態に陥った。我々は誓ったとおり必ず行い，天の女王に香をたき，ぶどう酒を注いで捧げ物とする。我々は昔から父祖たちも歴代の王も高官たちもユダの町々とエルサレムの巷でそうしてきたのだ。われわれは食物で満ち足り，豊かで，災いを見ることはなかった。また女たちは「わたしたちが天の女王に香をたき，ぶどう酒を注いでささげたとき，天の女王の像をかた

どったパンを供え，ぶどう酒を注いでささげたのは夫も承知のうえでのことではなかったのか」といった。』ここにはアプロディテやウラニアへの香料の奉納が述べられている。

38 Cf.エレ 32：29，ウガリット *CTA* 14: 2-3，*ANET* 143f.

39 ドゥムジからアドニスへ『ギリシャの神話と儀礼』ヴァルター=ブルケント著　橋本隆夫訳（リブロポート，1985）156 頁以下を参照せよ。

40 ギリシャのアドニス祝祭の特徴を示す儀礼として次のようなことが挙げられる。

(1)陶片で作られた庭に種を蒔く行事をする。最後にはこの庭は水中に投げ捨てられる。

(2)死んだ神の像を展観する行事がある。運び出されて水中に投げ捨てられる。代理埋葬の前に行われる。（地中海地方に広く見られる儀礼である。）

ヴァルター=ブルケント　前掲書　158 頁を参照せよ。

一般にアドニスの園と言われている痕跡が聖書にある。イザヤ書にでてくる「神々にささげる園」（17：10）がそれである。『お前は救い主である神を忘れ去り，砦と頼む岩を心に留めていない。それなら，お前の好む神々にささげる園を造り，異教の神々にささげるぶどうの枝を根付かせてみよ。』

41 断片 B 10-13「あなたが半年，あなたの姉さんが半年，／あなたが（元気に）動きまわっている間は［彼女は倒れ伏し］，あなたの姉さんが（元気）に動きまわっている間は［あなたが倒れ伏すのです］。［……］／浄らかなイナンナはドゥムジをその身代わりにあたえた。」

42 Aristeides は 2 世紀のアテナイのキリスト教護教家で，後のトマス説の先駆者である。

43 Apollodoros は前 180 頃の生まれ。アレキサンドリアからアテナイに移って活躍した。神話，神学，地理，言語など多方面にわたった著述がある。

44 古代東地中海では季節の変化，特に植物が毎年生育し，枯れて死んでいく様を神話化した。その悲しい死と，喜ばしい復活を悲嘆と歓喜で表す儀式として祝ったのである。この主題はデメテルとペルポセネの神話の中に見い出すことができる。前 7 世紀ホメロスが書いたとする『デメテルへの賛歌』がそれである。これによれば，麗しいペルポセネは緑なす野原で，野バラやクロッカスなどの花を摘んでいる。すると突然大地が割れ，冥界の王プルトンが現れ，自分の花嫁とするためペルポセネを深遠の国へ連れ去ってしまう。母デメテルは悲嘆に暮れる。海山を越えて娘を捜索するが見出せない。デメテルは娘を奪われた怒りのあまり，穀物の種を地下に埋もれたままにし，大地か

ら芽を出さないようにする。これに驚いたゼウスはプルトンに花嫁ペルポセネを母親のデメテルに返すように命令する。さもなければ人類は飢えて死に，神々はもらえるはずの供物を捧げてもらえなくなる。冥界の王プルトンはゼウスの命に従うこととなった。ペルポセネを天界に戻すにあたって，これを食べるとまた自分のところに必ず戻ってきたくなるというザクロの実を与える。しかしゼウスはペルポセネに条件をつけた。一年の3分の2を天界で母親や神々と過ごし，残りの3分の1を冥界で夫プルトンと暮らし，毎年，大地が春の草花で被われる頃に冥界から戻ってくることでる。ペルポセネはこの条件を喜んで受け入れる。母デメテルは耕された畑の土から，穀物を芽生えさせる。ここにも3分割を見ることができるが，これもエジプトとの関係を示唆するものである。詳しくはサー・ジェムズ・ジョージ・フレーザー著内田昭一郎他訳『図説金枝篇』(東京書籍，1994年) 214頁を参照せよ。

45　アシェラはアッカド語資料では Ašratum (バビロン第一王朝前1830-1531) は Amurru の配偶者としてでてくる。前14世紀の前葉 Asherah 女神の名が Amurru 王の名に Abdi Aširta として現われる。Amarna 書簡にも散見される。ウガリットテキストに 'atrt がでてくる。アシェラはエルの配遇者であると同時にバールの配遇者でもある（バーラットの名が与えられている)。

46　王下23：4『……主の神殿からバアルやアシェラや天の万象のために造られた祭具類を全て運び出させた。……』

47　王上14：15『……彼らがアシェラ像を造って，主の怒りを招いたからである。』

48　王下21：2『彼は主がイスラエルの人々の前から追い払われた諸国の民の忌むべき習慣に倣い，主の目に悪とされることを行った。』

49　アシュタロト（複数形）は西セムの豊穣女神でバビロニアのイシュタル，シュメールのイナンナに相当する。ただしイシュタル／イナンナの戦争女神的性格は後退している。アラムではアタルガティス／アシュタル（メシャ碑文　17行）である。エジプトにおいてはイシス／ハトホル（12王朝　前1991-1786）であり，ハトホルはバーラット女神（ビュブロスの主神）と同一視された。ギリシャ／ローマの場合はアプロディティ／アルテミス女神がアシュトレトに当る。一方でバーラットもアシュトレト女神と看做された。

50　『ソロモンは，シドン人の女神アシュトレトとアンモン人の憎むべき神ミルコムに従った。』

51　これについては月本昭男『現代聖書講座』(日本基督教団出版局，1996年) 第1巻　聖書時代と考古学　第14章が詳しい。337頁-350頁。